

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 23 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720179

研究課題名(和文) 視聴覚実験を用いたオノマトペの特殊性に関するフレーム意味論的研究

研究課題名(英文) An audiovisual-experimental study of the frame-semantic properties of mimetics

研究代表者

秋田 喜美 (Akita, Kimi)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・講師

研究者番号：20624208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：フレーム意味論を基盤とする本研究は、主に日本語の擬音語・擬態語(オノマトペ)が持つ豊富な意味内容を視聴覚資料を用いて探究した。手法としては、近年の認知言語学が中心に据える内省・コーパス・実験を組み合わせた。具体的には、オノマトペの構文的・意味的制限の分析、視聴覚コーパス(「NHK東日本大震災アーカイブス」など)を用いた抑揚・発声法・ジェスチャーに関する特徴の観察、さらにそれらの成果を踏まえ、ビデオや図画を用いたオンラインオノマトペ事典の作成を行った。

研究成果の概要(英文)：This frame-semantic study delved into the fine-grained semantic content of mimetic/ideophonic words in Japanese with the help of audiovisual resources. Combining traditional methodologies in linguistics (e.g., introspection) with new "cognitive" methods (e.g., corpus statistics, experiments), we analyzed the constructional and semantic restrictions on mimetics and their paralinguistic correlates (e.g., intonation, phonation, gesture). These findings were reflected in the compilation of an online multimedia "encyclopedia" of Japanese mimetics.

研究分野：言語学

キーワード：オノマトペ 擬音語・擬態語 フレーム意味論 コーパス 視聴覚実験 マルチメディア辞典 音象徴
認知言語学

1. 研究開始当初の背景

(1) オノマトペ (擬音語・擬態語) の意味については、従来「鮮明」「感覚イメージ的」「直感的」などの主観的形容ばかりがなされてきた。その原因の一端は、日本語などを母語とする研究者にとっては、オノマトペの意味はあまりに「自明」であり、一々説明せずとも直感的に分かってしまうことにある。一方で、例えば「てくてく」の意味を説明するよう求められた場合、「人が軽快に歩く様子」ではどこか物足りないように感じるのもまた事実である。こうした直感は、非母語話者にとって共有しがたいものであることは勿論、母語話者にとっても、方言や時代が少しでも違えば共有されない恐れがある。例えば、つい最近の表現である「ぬるぬる動く」は、アニメキャラクターがCGのように滑らかに動く様子を表すが、これを知って驚く日本語話者は少なくないであろう。従って、オノマトペの意味論研究は、何らかの方法で実証性を高める必要がある。

(2) 同様の問題は、日本語教育でも取り上げられることがある。オノマトペは、日本語学習者にとって最大の難関の1つであるためである。実際、これまでに20冊以上ものオノマトペ辞典が出版されている他、イラストやビデオを用いたオノマトペ教材の開発も数件見られる。しかし、これらの資料は必ずしも実用レベルに達しているとは言えない状況である。その理由の1つとして、「どのオノマトペにどのメディアを用いるのが効果的か」が一切考慮されていないことがある。ビデオ教材ではビデオばかりが、イラスト教材ではイラストばかりが使われているのだ。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、「フレーム意味論」(Frame Semantics) というきめ細かい意味を扱う理論的枠組みと、「視聴覚資料」という方法論的基盤を頼りに、実証性を備えたオノマトペの意味論を押し進めることを目的とした。日本語には、オノマトペが豊富な言語としては例外的に大規模な言語資料が存在する(オノマトペが豊富とされる言語には、他に韓国語、バスク語、ズールー語、ハウサ語、セマイ語、ケチュア語などがある)。本研究はこの強みを活かした学際的かつ質的・量的な研究である。

(2) 言語学的な目的に加えて、理論的・実証的基盤を有したオノマトペ学習の支援を目指し、本研究では「マルチメディア日本語オノマトペ事典」(MEJaM) というウェブサイトを開発することも目的とした。この「事典」では、(1)の成果を活かし、各オノマトペの意味の説明に適したメディア(例:ビデオ、アニメーション、イラスト、コロケーション情報、比喩)を選択的に用いるという方針をとっている。

3. 研究の方法

主たる研究方法としては、近年の認知言語学が中心に据える内省(作例)、コーパス(言語資料)調査、実験の3種を用いた。

(1) 内省調査としては、各オノマトペがどういった文法的・構文的特点を持つか(例えばどういう場合に「と」が付くか)を特に構文形態論(Construction Morphology)という理論を用いて分析した。また、各オノマトペの意味の多様性ないし「多義性」について、韓国語・中国語・英語との比較を通して考察した。

(2) コーパス調査としては、主として「国会会議録」「名大会話コーパス」「NHK 東日本大震災アーカイブス」という3つの話し言葉資料を用い、日本語オノマトペの言語的・パラ言語的特点を観察した。特に震災データ(被災者等へのインタビュー)には、書き起こしに加えてビデオ・音声が存在するため、従来のオノマトペ研究では未着手であったイントネーションやジェスチャーといったパラ言語的特点の量的考察が可能となった。

(3) オノマトペ事典に用いるべきメディアの選定のため、視聴覚情報がどれほど強く各オノマトペを想起するかについて、簡単な産出実験により検証した。具体的には、辞書の説明または視聴覚情報(静止画、動画)を日本語母語話者に提示し、それぞれ何というオノマトペを意図したものかを想像させた。

4. 研究成果

本研究の成果は多岐に渡る。その一方で、いずれの成果も、オノマトペのきめ細かい意味と実証的に向き合うことで得たものである点が一貫している。

(1) 内省的手法により得た成果としては、主に日本語オノマトペの構文的特点に関するものと、その多義性に関するものが挙げられる。両者は、オノマトペの意味内容の詳細に迫るという点で共通しているとともに、本研究課題のフレーム意味論的観点を示すものである。

まず、構文的特点については、以前より難題とされてきた「と」の分布に関する一般化を構文形態論の観点より提案した。それによると、「てくてく歩く」のように「と」が現れない例では、オノマトペは動詞とある種の「複雑述語」をなしており、それゆえに意味的に強い関係にある動詞を好み(?てくてく出勤する)、その直前へ出現を好む(?てくてく太郎は通りを歩いた)と分析した。

一方、多義性については、他言語との比較により、日本語の擬声語(例:ぴよぴよ)が複数の意味を持ちにくいこと、擬音語が「メトニミー的」な意味派生(拡張)を起こしやすいこと(例:餅ががちがちだ(=叩いたら

かちかち鳴りそうなくらい固い))、動詞に組み込まれたオノマトペのほうが「メタファー的」な拡張を起しやすいこと(例: がたがたというな (+組込) vs. ?がたがたというな (-組込))を指摘した。

以上に加え、「オノマトペで表せない意味とは何か?」という疑問を出発点に、オノマトペの動的性質を指摘する研究も行った。この特性により、例えば日本語に純粹に味・匂い・色を表すオノマトペがないこと、「描写構文」に用いにくいこと(例: ??魚をぴちぴちで食べた)などが捉えられる。この根本的な指摘は、発展が待たれるオノマトペの理論的研究の基盤となることが期待される。

(2) コーパス調査による成果としては、特にオノマトペ使用頻度の経年変化と、オノマトペの典型的特徴と統語の相関を実証した。

前者については、国会会議録を用いて、戦後60年間でオノマトペの使用が増えていること、その傾向がオノマトペの構文タイプにより異なることを指摘した。図1に示すように、相対的に増えているのは「ぶらぶらと」のように「と」の付く形である。

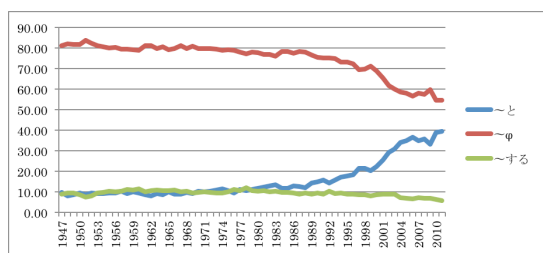


図1. オノマトペ使用頻度の変遷

後者については、震災データを用いて、オノマトペの典型的特徴、即ちイントネーションの高まり、裏声や囁きなどの特殊な発声法、映像的ジェスチャーとの同期が、「~と(例: ぶらぶらと歩く) > ~φ(例: ぶらぶら歩く) > ~する/だ(例: ぶらぶらする)」の順で少なくなることを量的に示した。

また、名大会話コーパスにおける友人間の雑談を用いて、一般副詞化したオノマトペ(準オノマトペ副詞)に比べ、純正オノマトペが肯定平叙文という「基本的」な文に現れやすいことを示した(図2)。さらに、この傾向が「~だ(例: だろだろだ)」の形では弱まることも分かった。

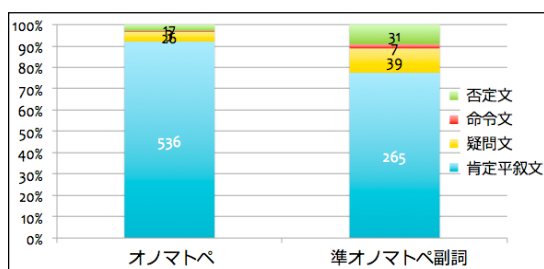


図2. オノマトペの生起文のタイプ

以上の発見は、オノマトペが段階性を持って言語構造に組み込まれていること、また、それに伴い様々な「オノマトペ的」特徴が失われることを示している。

(3) 最後に、視聴覚的素材を用いたオノマトペ事典の構築については、日本語話者への実験により、主として以下の成果を得た。まず、具体的で「鮮明」な意味を持つオノマトペといえども、全てがビデオによる説明を好むわけではないことが分かった。例えば、「ずきずき」が表す内的感覚には、図3のように不可視的情報を可視化したイラストやアニメーションのほうが効果的である。



図3. 「ずきずき」

また、心理的なオノマトペ(例: うっかり、がっかり)にはシナリオを含むビデオなどが適切である。さらに、多くの場合に辞書的説明と視聴覚的刺激の組み合わせにより理解が促進されることが窺われた。こうした知見は、開発中のウェブサイト直接的に反映させている。「語の意味によって使用メディアを変える」という方法は、オノマトペ以外にも応用可能であり、今後の語彙教育一般への貢献も見込まれる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計18件)

- ① Akita, Kimi. To appear. "A multimedia encyclopedia of Japanese mimetics: A frame-semantic approach to L2 sound-symbolic words," *Cognitive-Functional Approaches to the Study of Japanese as a Second Language*, 査読有
- ② Kiyama, Naoki and Kimi Akita. To appear. "Gradability and mimetic verbs in Japanese: A frame-semantic account," *BLS*, Vol. 41, 査読有
- ③ Akita, Kimi, Satoshi Nakamura, Takanori Komatsu, and Sachiko Hirata-Mogi. 2015. "A quantitative approach to mimetic diachrony," *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 22, pp. 181-195, 査読有
- ④ Akita, Kimi and Takeshi Usuki. 2015. "A constructional account of the 'optional' quotative marking on

Japanese mimetics,” *Journal of Linguistics*, First view, 査読有
DOI:
<http://dx.doi.org/10.1017/S002222671500171>

⑤ Akita, Kimi. 2015. “Register-specific morphophonological constructions in Japanese,” *BLS*, Vol. 38, pp. 3-18, 査読有

⑥ Akita, Kimi. 2014. “Review: *Construction Morphology*, by Geert Booij, Oxford University Press, Oxford, 2010,” *English Linguistics*, Vol. 31, No. 1, pp. 275-283, 査読有

⑦ Akita, Kimi. 2013. “Constraints on the semantic extension of onomatopoeia,” *The Public Journal of Semiotics*, Vol. 5, No. 1, pp. 21-37, 査読有
<http://www.pjos.org/index.php/pjos/article/view/9646>

[学会発表] (計 26 件)

① Akita, Kimi. “Sound effect symbolism crosslinguistically: The case of Japanese and American animated cartoons,” The 10th International Symposium on Iconicity in Language and Literature, Tübingen University (ドイツ連邦共和国テュービンゲン市), 2015年3月27日.

② 秋田喜美. 「オノマトペの言語的統合性」招待講演, パネルセッション「有契性か恣意性か: オノマトペと音象徴」, 日本フランス語学会フランス語談話会, 明治学院大学(東京都港区), 2014年7月19日.

③ Akita, Kimi. “Linguistic integration of Japanese mimetics and its typological implications,” 招待講演, Structuring Sensory Imagery: Ideophones across Languages & Cultures, ロチェスター大学(アメリカ合衆国ニューヨーク州), 2014年5月2日.

④ 秋田喜美. 「オノマトペの認知言語学: 擬音語の意味拡張に対する非類像性制約」招待講演, 大学院国際言語文化研究科第19回応用言語学講座公開講演会, 名古屋大学(愛知県名古屋市), 2014年1月20日.

⑤ Akita, Kimi. “The typology of manner expressions: A preliminary look,” 基調講演, International Workshop SYLEX III: Space and Motion across Languages and Applications, サラゴサ大学(スペインサラゴサ市), 2013年11月21日.

⑥ Akita, Kimi. “Constructing an online multimedial encyclopedia of Japanese mimetics,” 招待講演, Cognitive and Functional Approaches to the Study of Japanese as a Second Language Symposium, カルガリー大学(カナダアルバータ州), 2013年6月21日.

⑦ Akita, Kimi. “Frame phonosemantics: A frame-semantic approach to Japanese mimetics,” 招待講演, Czuczor-Fogarasi Conference, Jokai Mor Muvelodesi Kozpont (ハンガリーブダエルシュ), 2012年10月6日.

[図書] (計 2 件)

① Hiraga, Masako K., William J. Herlofsky, Kazuko Shinohara, and Kimi Akita, eds. 2015. *Iconicity: East Meets West*, John Benjamins Publishing Co., 279.

[その他]

個人ホームページ

<https://sites.google.com/site/akitambo/>

マルチメディア日本語オノマトペ事典

<https://sites.google.com/site/jpmimeticthesaurus/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋田 喜美 (AKITA, Kimi)

大阪大学・大学院言語文化研究科・講師

研究者番号: 20624208